科学と詩作（五）

―― 判断の源泉へ ――

中島　聰・栗栖照雄*

岡山理学大学教養部

*岡山理科大学非常勤講師

（1991年9月30日　受理）

我々は本論の(一)から(四)において，西洋・ヨーロッパの思考空間とそこに展開した形而上学的思考の特質を概観した。ハイデガーの「存在の歴史」に基づく総括に従ってその展開の概略を示せば次のようになろう。[1)]

西洋形而上学の思考空間は，プラトンが卓越した叙述能力をもって表現したイデアとアイステートンとコーリスモスによって銘記される空間であり，その特質とは，思考する主体にアプリオに備わる先験的理念を基準（視点）とした計算的思考である。計算的思考は，その真理性の基準を領得するに際して「数学的なもの」を照準にする（本論二参照）が，近代形而上学は「数学的なもの」の一面的展開として概念的思考を極限にまで推し進める。その際この概念的思考は，基準となるものの根拠・地盤を，cogito としての主体（主観）＝自我のうちに見いだすことによって，思考における至上の権威を獲得することになる。この経過は，デカルトによる明証性の根拠としての cogito の規定とライプニッツによるこの根拠の原理化，更にカントによる科学的認識の先験的基礎づけの試み，という道筋を通る。この道筋は，近代科学の成立と，その地球的規模での拡大的展開を必然たらしめるものであった。

I

ハイデガーによれば，プラトンの思考空間の開示から近代科学の成立と自己展開へと到る西洋形而上学の歴史は，その見かけの目眩く変転と多彩極まりない成果にも拘らず，そこに統べている「存在」と「真理」の「次元」においては，一つの停止状態 ＝ Epoche（時期）の単なる持続を意味するものでしかない。「存在の歴史」は，閉じられた存在空間そのもの，その空間の中で人間が自由に思考し決断し行動し休止することによって一つの歴史を展開してゆくところの，運命的に「一なる時」である。

従って，この存在空間の内で生起する一切の歴史的事象は，その本質由来において，「形而上学的」であり，そしてそれはまたヨーロッパの「運命的な一なる時」を証示するものとして，論究されねばならない。一切の本質は，西洋 ― ヨーロッパを襲った一つの運命に

根づいている。この運命は，ハイデガーの「存在の歴史」の観点から見て，次のような一つの公式にまとめられる。[2)]

西洋の運命に基づくこの歴史は，「存在の脱去（Entzug）」とその「脱去」がそのものとして思考されないこと・存在忘却と共に始まり，この忘却の中を進行する。存在は常に，存在者にその顕示性を明け渡すことによって自らを脱去するという仕方で，生起する（sich ereignen：sich zuschicken）。従って存在脱去は存在の本質に帰属する。自らを脱去した存在は，存在者の顕示性のヴェールに蔽われた根源的な「秘密（Geheimnis）」として，存在者の顕示性に基づくあらゆる関係を根底から支配している。存在の忘却とは，かかる秘密として支配している存在に対して，特別に（eigens）注意が払われて（achten）いない状態を謂う。思考は存在の本質に共属するもの・需用されたもの（das Gebrauchte）である故に，秘密へと脱去している存在は，思考すべきもの（das Zu-denkende）という形で，思考を常に一つの「逼迫（Not）」の内に置く。存在忘却とは，思考が自らのこの本質的「逼迫」を回避してそれに呼応しないこと，しかも，このこと自体が，思考の変質によって思考自身に覆い隠されることを謂う。このような状態において，思考はその密かな「逼迫」を，存在者に注目しつつ存在者に即して存在を思考することによって，一層深く遮蔽する。この遮蔽によって，存在者はそれ自身の真理（非隠蔽性）を獲得すると共に，存在はその本質の真理において思考されなくなる。これをハイデガーは存在自体の「外留（Ausbleiben）」と呼び，その「外留」こそ「ニヒリズム」の「本質（Wesen）」であり，その歴史が「形而上学そのもの」に他ならないとするのである。

かかる本質を有する思考において，「唯一必要なことは，思考が存在自体の要求に呼応して，先ず自ら外留の中にある存在そのもの」を「迎えて思考する（entgegendenken）」ことであり，また，その真正な本質に適って正しくできるのはそれのみである。思考の本質的に敬虔で謙虚な「退歩（Zurückschritt）」は，存在に従って，その「放置から一歩下がり」人間の本質へと赴く。

この「退歩」の境域において，存在者の非隠蔽性の内にそれ自身の非隠蔽性を留保し（vorenthalten），貯蔵し（sparen）ている存在自体が「「既に人間の本質の中へ先触れし（vorsprechen），その中へと自己を語り入れている（sich dahin einsprechen ＝ 鼓吹する）」。言わば，「外留の中に自己を留保している存在」は，それ自体「存在自身の約言（Versprechen seiner selbst）」であって，「迎える思考」はこの約言を，存在がかかる約言としてあるところのものとして，悟る（innewerden）ことである。

「約言として自らは身を隠している」存在の歴史・ニヒリズムの本質が「存在自体の運命（Geschick）」である。そして，このニヒリズムの本質の非本来的なものが，「約言の隠蔽」としての「外留放置の歴史」である。しかし，この歴史がまた，「約言の護持（Verwahrung）がそれ自身のうちに隠蔽されたまま生起するところのその護持の歴史」に他ならない。このような在り方において現象するものが「秘密」と呼ばれる。「ニヒリズムの本質の非本来

的なものにおいて，約言の秘密が生起し」，「歴史となったこの秘密そのものが，存在外留の放置の歴史のその本質である」。「存在者そのものの思考における存在自体の放置は，存在者そのものの非隠蔽性の歴史であり」，「この歴史が形而上学である」。「形而上学の本質は，それが存在自体の約言の秘密である，という点にある」と言われるのである。

II

我々はここで再び，本論の端緒を切った(一)の「羞恥」の問題に帰り行かねばならない。そのためには，西洋近代科学の本質由来を，「秘密」として護持する存在の歴史を，その運命の次元から「迎えて思考する」ことが必要である。それには，ハイデガーによって「科学」よりも更にその運命に親近な次元に位置付けられる「技術（Technik）」の本質由来を辿るのが有効である。「科学」（science／Wissenschaft）を，厳密な意味で西洋 — ヨーロッパの形而上学に帰属する一事象として把握するならば，それは，やはり厳密な意味で，西洋 — ヨーロッパ的な「技術」の領域に帰属する。かかる意味で，「科学」は「技術」の内に本質を有するものとされる。「科学」は「技術」の領域における特殊な，且つ最も表明的な表記法の一つである。「技術」の領域のもう一方に位置するものが，「芸術（Kunst）」である。「存在の生起」に視座を据えるハイデガーの科学論・技術論・芸術論の要諦はここにある。従って，ここでは「技術」の本質とその歴史的展開についてのハイデガーの論述の跡を概観することにしよう。

ハイデガーの西洋の技術の本質とその展開に関する論述は，凡そ三つの事項に集約されよう。即ち，技術そのものの「本質」，「事物」存在の解釈，「命題」による表記，の三項である。この三つは互いに共属しあって，形而上学の内容としてその歴史的な変容の実質を構成する。

先ず技術の本質についてのハイデガーの論述から見てみよう。

ハイデガーは技術の本質を論じるに当って先ず，技術の一般的通念，即ち「技術が手段であると共に人間の行為である」という「機具的・人間学的（instrumental／anthropologisch）規定」が不完全であるという批判から始める。それは「技術」を次のように規定する。

「技術といわれるものには，道具や器具や機械を製作することと使用することも，またその製作されたものと使用されたものさえも属するし，それらを役に立つようにさせる種々の需要や目的も属する。これらの整備（Einrichtung）全体が技術である。技術そのものが一つの整備であり，ラテン語でいう instrumentum である」。[3)]

このような技術の機具概念が，「人間を技術への正しい連関へともたらそうとする，あらゆる努力を規定している」。「技術を手段として適切に掌握すること」，「技術を精神的に手中に収めること」が現代の緊要事とされる。「技術を制御しようとする。この制御の意欲は，技術が人間の支配から滑り落ちる惧れが大きくなるほど，切迫したものになる」。[4)] ここに人間を幻惑する技術の隠された、否人間の意志的な視界を越えた不可触な本質がのぞいて

いる。

この規定は「正当（richtig）」ではあるが，未だ「真なる（wahr）」ものではない，と言う。「正当なもの」は「必ずしも，問題の事象をその本質において披瀝するとは限らない」。「真なるものが初めて我々に，そのものの本質において我々に関わって来るところのものに対して，自由な関係をもたらすのである」。[5)]

技術についてのこの正当な規定から，真なるものへと到るためには，次のように問われねばならない。—「機具的なものはそれ自身何であるか」，—「手段（Mittel）や目的（Zweek）といったものは何に属しているのか」。

III

「手段とは，それによって或ることが引き起こされ，そうして或ることが達成されるところのものである。或る作用（Wirkung）を結果（Folge）として有するものは，原因（Ursache）と呼ばれている。しかし，それによって或る他のことが引き起こされるところのものだけが，原因とは限らない。それに従って手段の在り方が規定されるところの目的もまた，原因として妥当する。目的が追求され，手段が用いられるところ，即ち，機具的なものが支配しているところでは，原因性（Ursächlichkeit），即ち因果律（Kausalität）が統べている」。[6)]

ハイデガーは，次いでアリストテレスの「四原因」説（通常，causa materialis/causa formalis/causa finalis/causa efficiens として表される）を取り上べるが，この説における「原因」の語義解釈の仕方によって，即ちギリシア語の *aition* の語義を保存しているか，それともラテン語の causa の語義に従うかによって，技術の「真なる」本質の理解に達するか，それとも単に「正当な」理解に留まるかが，決定されるとするのである。実はそれ以上のことがこの語義解釈から派生している。「原因」のギリシア的源義の忘却とそのラテン的転義によってこそ，技術の西洋における特筆的な展開が約束され，同時に，西洋における技術の本質の隠蔽的支配が運命づけられることになるのである。技術の本質は *aition* の中に護持され，技術の現実的展開は causa から始まる。

causa は cadere（落ちる）という動詞に属し，「或ることが結果においてしかじかの状態になるようにさせるところのもの，を意味する」。それに対して *aition* は，「作用する」や「引き起こす（させる）」といったことには全く関係なく，ギリシア的には「他のものに責任を負っている（verschulden）ところのもの」[7)]を意味する。例えば，銀の供物皿の存在に対して，①銀はその材料（*hyle*）として責任を負い，②形はその見相（*eidos*）として責任を負い，③奉納・寄進はその目的（*telos* = 完了：終了）として責任を負い，④銀細工師は，銀の皿が完成品として予め準備され且つしつらえられていることとして責任を負っている。しかしここで重要な点は，細工師がそうした責任を負っているのは，決して「彼が作用を及ぼして，その完成した供物皿を，或る行為（Machen）の成果（Effekt）として，

即ち作用因（causa efficiens）として，生じさせることによってではない」。[8)]

「銀細工師は，上記三つの責任の負い方を勘考し（überlegen）集約する（versammeln）。勘考は，ギリシア語で *legein/logos* といわれる。それは *apophanesthai* 即ち明るみにもたらすということである。彼は，そこから供物皿が現われ自立することがその端緒（Ausgang）を獲得し保持するところのものとして，共に責任を負っている」。ここで本質的な点は，銀細工師の製作作業でも，勘考活動でもない。「責任を負う」ことの本質は，「明るみにもたらす」こと，即ち「或る現存するものが現存すること」そのものにある。「責任を負う」ことは，「或るものをその現-存（An-wesen）へと出現するように導くこと」を謂う。かくして *aitia* とは「誘い-出すこと（Ver-an-lassen）」，「未だ現存しないものを現存へと到来させる」[9)]こととして，「*poiesis*（創造），出-現-させること（Her-vor-bringen）」である。[10)]

ハイデガーの意図するところは，この *poiesis*（出-現-させること）を「その広がり全体において」思考することによって，「技術」を「存在」と「真理」の現象に還元することにある。既に見たように，彼は「真理」現象をギリシア語 *aretheia* の原義に添って「非隠蔽性」の生起として理解する。「出-現-させることは，隠蔽性から非隠蔽性へと引き出すこと」であり，「隠蔽されたものが隠蔽されざるものへと到来する限りにおいて，出来する（sich ereignen）ことである」。この「到来（Kommen）」が，「真理」の出来として「開発（Entbergen）」といわれる。[11)]かくして技術の「本質」次元＝「真理」が開示された，―「技術は，単なる手段ではなく，開発の一つの仕方である」。[12)]

III

技術の本質についてのこうした理解から考察するとき，形而上学として後代，技術（科学），芸術，自然のそれぞれの次元へと分岐することになる一つの地点が，それぞれの源泉として明らかになる。この合一する源泉とそこからの分岐を共に「その広がり全体において」考察するとき，技術は初めて「真なる」規定を獲得する，とされる。かかる考察は，上記三つの次元を次のように理解する。

「自然（*physis*）は，自ずから発現すること（das von-sich-her-Aufgehen）」であり，それは，「自然に（*physei*）現存しているものは，出現して開示することをそれ自身の内に（*en heauto*）有する」故に，まさに「最高の意味で」の「出現させること＝*poiesis*」である。「それに対して，技巧的ないしは芸術的に出現させられたものは，例えば銀の皿は，出現して開示することをそれ自身のうちにではなく，他のもののうちに（*en allo*），即ち職人や芸術家のうちに有している」。両者とも「引き出す」ことを通じて，それぞれが「その都度それぞれの現われに到る」ことにはちがいないが，そこには，人間本質（歴史的存在）の変容に伴う分岐の可能性が壊胎されている。

根源的に一なる源泉に由来しながら，分岐しながら「近代技術（Technik）」へと展開する誘因がそこにはある。Technik の語源であるギリシア語 *techne* は *episteme* と同行する

言葉であり，「最広義の認識(Erkennen)」を意味する。「それらは二つとも或るものに通暁していること・熟達していること，を意味する。認識するということは，開明しつつ開発することである」。[13]「*techne*は *aretheuein*（開発すること）の一つの仕方である」。しかしそれも「自分自身で自分を引き出すことなく，未だ現前していないもの，従ってあれやこれやの見相をとってその状態になるところのものを，開発する」。[14]「このような開発は，船や家の外見と材料とを，その完成が完全に見通された物に基づいて，予め纏めあげ，そこからその仕上げ方を定めることである」。技術領域の西洋―ヨーロッパにおける独特の展開は，この「纏めあげ（集約 = logos)」と「定めること」が，歴史的現存在の変容と形而上学の形成に呼応して特異な性質を帯びることに由来している。それを最も典型的な形で表示しているのが，形而上学における「事物一般」の規定と，言表における「命題」の優先という事態である。そしてそれは，西洋近代科学のもつ独特な形態の本質でもある。

ハイデガーは「近代自然科学」の基本的命題として次のような命題を挙げる。それが基本的であると謂う意味は，内容的且つ形式的に上記の要素を含んでいるためであって，そこには本来の意味での「根本命題」（自我命題・矛盾命題・根拠命題）や「運動法則」が，その基盤として前提されている。

「事物とは，純粋な時間―空間―秩序の中を運動している物質的質点，或いはそれに相応してかかる質点の合成である」。

この命題が，それだけで現代物理学の物質観念の全体を言い尽しているかどうかは，この際問題ではない。ここではこの命題が，いかにして上記の要素を内容的且つ形式的に結合しているか，ということが肝要なのである。①近代科学の「事物一般」の観念（概念）はいかにして生まれたか，②その概念が「命題」としての言表形式にいかに本質的な影響を受けているか，ということである。

①については，二つの観点が挙げられる。「物質的質点」を(a)「材料（Stoff/Material)」として考察する観点と，それを(b)不変な「基体」として考察する観点である。

Ⅳ

(a)の観点は，上記のアリストテレスの「四原因」説に関係している。その際「原因」といわれるものは，*aition*（責任を負う）ではなく，cadere（ある状態に落着する）の意味で捉えられている。このローマ的変質に対応するのは，根源的意味（後述）を保有する「道具」が，本来隠蔽されているべき「機具的」性格において，即ち「手段―目的関係」において認識されるようになることである。この「手段―目的関係」は道具が，作られ使用されるものとして，存在することの徴標であるが，この関係が上記のような仕方で，「原因性・因果律」へと一般化される際，道具を作り使用する主体の作用「(Wirkung)」が強調されるようになる。「作用」は，或るものをその働きかけによって結果として或る状態へと落着させるものである。かくして，この関係の一般化と共に，その「作用」ということが強意

された「四原因」に基づいて，道具の製作作用に類比的に或る物の存在が分類されることになる。即ち存在の「作用原因」としての，「材料」，「見相」，「目的」，「動力（作用）」が定立される。そのうち「材料」は，人間が事物において最も共通に且つ日常的に身近に知見するところのものである。

歴史的に見れば，事物におけるこの「材料」という観念が，ギリシア的な *hyle*（*eidos* に対して単に相対的ないしは敵対的存在としてのみ許される）の意義を脱して，或る積極的な意義を獲得するためには，キリスト教における「無からの創造」の思想の影響が必要であった。即ち，無形のものもやはり，天なる父の創り給うた被造物に他ならず，そこにも父の御心がロゴス（法則）として秘められているはずである。人間がそれを探求し認識することは，父の御心に従う貴き行いに違いない―。「原子」の観念の形式が，このような精神動向の成果であることは疑い得ない。

(b)の観点（基体）は，②の問題（命題）に関係している。「プラトンとアリストテレスの時代に，諸特性の支持者（Träger）（＝基体）としての事物の規定が形成された」。[15]このような規定の成立は，彼らによる事物の発見と，それに関連した命題そのものの発見，および事物の本質規定のための真理性の基礎が命題の中にあること，即ち真理が事物への適合として命題の中に座をもつことの発見に呼応している。この呼応関係は，事物が「それとして自己を示すところの或るもの（＝対象）」として認識されることから生じる。命題はかかるものとしての事物についてみ，本来の妥当の可能性を有する。このような限定条件の下において，事物の構造と命題の構造と真理の構造は共属し合う。この三つの構造の不可分な共属性こそ，近代自然科学の強固な支柱の本質をなすものである。

命題（Satz/proposition）とは何か。それは真か偽である語の結合としての単純な言表である。命題は「或る対象について或る言表が述べられる」こととして，基本的に「命題対象（主語）＋ Copula（結合語）＋ 命題言表（述語）」という構造をもつ。命題における真理の本質は，「述語が主語に帰属すること，換言すれば，述語が主語に帰属するものとして命題において定立され言明されていること」[16]にある。命題の真理性はそこに指示されている帰属性を謂う。従って，かかる帰属性を明確に保持し，いかなる定立においてもその帰属性を確実に表明できるためには，即ち，その真理性が明確に判定できるためには，命題構造において一つの確固とした不変な要素の設定が要求される。もし命題が「或るもの（対象）―それは何であるか」に答え，しかもその答の真偽が明確に判断できる価値をもつものであるとするなら，何よりも先ず，それについて言表されるところの対象が「確固とした不変な要素」として予め定立されているはずである。帰属性はかかる不変な要素に対してのみ，ようやく帰属性であるにすぎない。命題における主語は，真理性への要求が強ければ強いほど，こうした要求に答える責任が重くなる。それは，対象の如何に拘りなく，命題の構造そのものに内属する性質である。

今「事物とは何か」（「何が事物か」ではなく）と問われ，その答えとして事物の規定が

命題によって言明されるとすれば，この事物の規定の仕方そのものが，命題の構造上の要求に従って規定されることになる。このような事物への問いが起こった瞬間に，命題がその答えを引き受けた瞬間に，同時に事物の真理（存在）（＝事物性）も決定していたといえる。かくして事物の事物性は，命題における主語―述語の関係に即応して，支持者―諸特性，実体（substantia）―偶有性（accidens），基体（*hypokeimenon*）―付帯性（*synbebekos*）という，形而上学に特有な「伝統的本質規定」[17]において周知のものとなる。

V

命題における事物の規定は，「カテゴリー（範疇）」の発見とそれに対応する「事物一般」という観念の妥当化，という事態を継起させる。この「カテゴリー」と「事物一般」の観念こそ，近代科学の「数学的」本質特徴に最も深く適合する思考・存在・言表・事物（物質・物体）および真理基準の形態である。

カテゴリーは，ギリシア語の *kata*（上から下の或るものに向かって）―*agoreuein*（陳述する）に由来する言葉である。[18]このギリシア語はそのまま「命題」としての言表形式を指している。このことは，西洋の思想形態における「命題」構造の深刻なまでの影響力を，如実に示している。

カテゴリーとは，命題におけるあらゆる言表において事物を一般的に特徴づけているもの＝事物性と普遍性を規定するものである。それは一切の命題における主語と述語の結合性に含まれる，最も普遍的・一般的な帰属性である。カントに従えば，先験的なカテゴリーと見做されるものは質・量・関係・現存在の四つであるが，ここで重要な点は，その妥当性の根拠ではなく，このカテゴリーの発見と批判的基礎づけによって，一般性と普遍性における事物の取り扱いに一つの価値を保証することになった，という点である。勿論その価値は，カテゴリーの構造への自己拘束によって生じるものである。近代科学の判断は，すべてこのカテゴリーに対する自己拘束への自由な決断に基礎をおいている。

こうしたカテゴリーが先験的，普遍的・一般的に判断を規定するものは，それが命題（判断）において具体的な規定として働く前に，常に予め規定に先立つ問いの中に働いているからである。一切の判断に先立って，「事物は何であるか―その質において：―その量において：―その関係において：―その現存在において」が予め問われている。こうした問いは，問う主体が，判断する構えを予め自らにとらせることによってのみ，可能となる。カテゴリーは，問うことが答えることに先行するかぎり，必然的に命題（判断）において「先験的」であらざるをえない。カテゴリーの発見およびその優越化は，人間が事物に対して問うことをもってその全体を超出し，認識しつつそれを我がものにし支配する，という構えを自らに課する一つの自己規定に基づいている。この自己規定の決断は，それが事物の普遍的支配を指向するものである場合には，事物の普遍的規定（カテゴリー）を判断基準として設定するよう，自らに命令を下す。かかる基準設定への自己命令が，cegito としての

自我に本有する「意志」の本質である。一切を「計算」によって支配せんとする主体は，この意志に他ならない。意志は本質的に「先験的」である。（ニーチェ）

この意志による計算にとってのみ，「事物一般」が，事物の「質」の普遍的規定である「物質（Material = 材料）的質点」として，その「量」の普遍的規定である「時間—空間秩序」として，その「関係」の普遍的規定である「因果律」として，その「現存在」の普遍的規定である「運動」として，それぞれ規定されることが初めて意味をもつ。

ハイデガーは言う，「存在者の存在（事物性）の最も一般的な規定（カテゴリー）」が，「その名称を言表から獲得しているということは，いかに強調しても強調しすぎることはない」。[19]

カテゴリーはそれ自身数学的なものである。数学的なものは，その本質動向において，自己自身の内に基礎を置くという要求をもっている。しかし実は命題そのものが，本質的に数学的な動向を有しているのである。カテゴリーの導出は，命題のもつこの内的必然から生起する。命題の本質は，基準設定と計算の意志である。意志のもつ自己超越の性格は，命題の自己遡源の性格に対応する。意志の上昇拡大は，命題の下降的凝集に対応する。命題は，それが真たらんと欲するとき，必然的に自ら根底たらんと欲する。命題はいついかなるときも，根本-命題（原則）への途上にある。それは自立への道である。「前以ていかなる事物も存在せず」，他のいかなる作用にも依存しない状態で，命題は自己自身による基礎づけを敢行せずには止まない。このような基礎づけの要求に呼び入れられたのが，デカルトであった。彼において命題はその純粋な姿を現わす。今，命題の前にあるのは，「命題一般そのもの」，「言表的思考の意味での定立作用（Setzen/Position）」のみである。今あるのは「定立する」=「言表する」=「思考する」のみであるが，それは「自己を定立する = 思考する」場合にのみ，数学的（自己基礎づけ）である。

かくして命題においては，cogito 定立は必然であり，そこに含まれる ego の存在も必然である（自我命題）。それと共に，一切の命題が ego に含まれているものを述語において定立するのであれば，主語に反して言表できないということも必然的である（矛盾命題）。「自我命題の設定は，〈私は矛盾命題に従う〉ことを意味する」。かかる「設定」と「従属」が，意志の自由な決断である。ここにおいて，歴史的現存在としての人間が，「近代（die moderne Zeit）」という活動地盤を我がものにしたのである。

VI

近代は，「人間が人間の地位に，特に人間によって構成されたものとして自己に関わり，それを特別に自分に関わっているものとし，こうして人間性の可能的な展開のための地盤として確保する」歴史空間である。それと共に「人間は，対象的なものとしての存在者に対していかなる構えをもつか，という仕方を自分自身に課する。人間の能力の領域を，すべて存在者を支配するための基準と実行の場所として占拠する，そのような人間の在り方

が始まる」。[20]

近代は，ハイデガーによれば，真理現象（開発）としての技術の本質が，上記 cogito の自己基礎づけと連動して，極端に一面的な展開を遂げる時（Epoche）である。即ち「近代（機械）技術」といわれるものがそれである。近代技術の本質特徴としては，次の三つが挙げされよう。①「自然」が全体的に予め，「エネルギー」として規定されること。②「自然」の全作用が一つの「体系」において記述されること。③思考が「計算」としての側面を極端に展開すること。この三つの本質特徴は，上記の歴史的動向と思考空間に帰属した事象として，共属し合っている。

①「近代技術を統御している開発（Entbergen）は，自然に対して，そのものとして般出され貯蔵されうるエネルギーを供給するように要求する，一つの挑発（ein Herausfordern）」となる。この挑発は，自然の中に隠れているエネルギーを，開発（aufschließen）— 変形 — 貯蔵 — 分配 — 転換という，相互に咬み合う計算的調整の軌道の中に引き出す。この軌道は，エネルギーがそこに存在するということ（現実性：Wirklichkeit）それ自身の現象であり，この軌道に内在している本質性向は，エネルギーの「軌道」としての現実性を「制御（Steuerung）」しつつ「確保（Sichrung）」する，という自然の存在様式にほかならない。その「制御」と「確保」が「挑発」的開発の主要特性とされる。[21]

「挑発」は，人間が自ら主観として cogito の基礎の上に立ちつつ，自然に向かって一つの立場を構え，その立場に向かって立ち現われる自然を対象的に「表象（Vor-stellen）」する，最も極端な仕方である。ここに統べている人間と自然の関係領域は，人間の具体的な意図的投企に先立って，「立てる（Stellen）」（= set）という根本性向を有している。この根本性向が統べているのが，「近代」という時（エポケー）である。ハイデガーは，この運命的な「時性（真理性）」を「集立（Ge-stell）」と呼び，「挑発」は，その真理性の最も極端な形態であるとしている。それは，一切が相互に計算可能になる軌道そのものを —その軌道状態における計算可能性に最も適合する事物の存在様式が「エネルギー」という観念である— 制御しつつ確保することを目指している。その軌道上にあるものの現実性は，相互の「作用（Wirken）」が軌道全体の制御と確保のために計算可能である状態に置かれていること，によって成り立っている。この場合，それらは，もはや単なる「対象（Gegenstand）」ではなく，それぞれが「次の調達のためにそれ自身調達されている」[22]もの，即ち「用象（Bestsnd = 備品として役立つもの）」である。「集立」が統べている領域，即ち近代技術の領域においては，すべての事物の現実性は「用象」性を意味し，もはや対象性でもない。

Ⅶ

②近代技術の本質に帰属する「体系（System）」の，現実的形態は，たった今上で述べた事柄，全体の制御と確保のためのエネルギー調達の計算可能な系列，である。近代の数学的思考には，「体系」が必然的に帰属する。System とは本来，現前するものが「秩序その

ものが初めて投企されるという仕方で，（その投企された）秩序へと接合すること」を意味する。近代的な意味では，「体系は，可知的なものそのものの内的接合であり，その基礎づけつつの展開および形成である」。[23] 何故なら「数学的なものの優越性」という要求 ―知の目的の強調と知の形式の基礎づけ― が現われ，その要求に呼応する形で「体系」が内的な必然性として，再び要求されるからである。数学的な知の構えは内的に，先行的な「全体性」と「統一性」を要求している。デカルトにおける人間の「自己自身への解放」と「自己拘束」は，この「体系」を形成することにおいてのみ，真に「存在者全体の真っ只中に，人間を置くことができ」，それ故，「この全体（神 ― 世界 ― 人間）は，一つの秩序の統一性として，把握され，秩序づけられねばならない」。[24]

「体系は，（本質的に）数学的なものであり，同時に思考の体系，ratio，理性（Vernunft）でなければならない。表明的で本来的な体系は，西洋において数学的理性体系への意志として始まる」。そして，この「理性」こそ ratio に由来するものとして，「計算」能力そのものを指すのである。

③「計算」の本質契機として，先行的な基準の設定ということがある。近代技術におけるかかる「基準」は，「体系の確保」それ自体である。それは，知の内的秩序の統一性の根拠 = cogito の自己確保に他ならない。この自己確保を遂行する主体が，近代的意味で（ニーチェの意味で）「意志」である。「意志」が「基準」を設定する，即ち，計算する。

この場合，「基準の設定」とは何を意味するか。この基準設定は，上述の原則即ち「自我命題」と「矛盾命題」による自己拘束を意味する。自己をかかる拘束へと構えさせるもの，それが意志である。さてニーチェによれば，「意志することは，命令すること（Befehren）である」。[25]上述の原則へと拘束するよう命令する意志にとって，「命題（A は B である）」は―命題はすべてかかる意志においてのみ生きている―その隠された活動として暗々裏に，「A は B であれよ」という響きをもっている。この命令は唯一このことへと向けられている。即ち自己確保へと。自己確保のための命令はすべて，自己命令である。自己命令が「意志」の本質である。

意志の命令的本質は，その能力と方向性を規定するものとして，近代技術の最も内的な必然性を形成する。「命令するということは，命令する者が行為的活動の種々の可能性を認知しながら自由に処理することのできる主人である，ということにその本質をもっている」。命令する者としての意志は，自己の知的な（自己意識した）「主人」たらんとすることによって，自己命令，自己操縦，自己服従，の要素をもつ。この自己命令の可能性を維持するために，意志は，常にその都度自己超越の要素をもつ。この自己超越は，「より強く」という「力」の本質を有する。意志は，自己確保を目指す限り本質的に「自己への意志」であり，またその限り「力への意志」である。

「力への意志」には，「維持と高揚」の二つの動向が存在する。「維持」は，意志がその都度到達し，更にそこを超越せんとする存立基盤の先行的確保を意味する。かかる基盤は，

意志が「常に信頼して依拠しうるものの圏域によって囲繞し，そこから自己の安全性（確保）を取り計らう」[26] ことのできるものである。「この圏域が，現存するものにおいて意志が直接に処理可能な用象（役立つもの）である。かかる意志にとっての「真理」は「力への意志がそこから自己自身を意志するところの圏域の存立の恒久的確保である」。意志はその「維持」のために「真理」を意志する。

ところがこの「確保」は，意志本質そのものの確保として、「命令可能性」の確保である。とすれば，それは同時に「可能性の開示と調達」のための「透視的先見（Vorblick）」が属している。それが意志の「高揚」の契機である。「力への意志」にとって，「真理は最高の価値尺度として認められない」。[22] 真理と共に，更に「自己を自己自身へと解放する意味の様々な可能性を創造すること」が，内的に要求されている。かかる創造が「芸術」である。「芸術」は，「透視的に（perspektivisch）」展望を切り開きながら，意志をして，「自己自身を触発し，自己超越する意志へと励起させる」。

かくしてハイデガーは，近代技術の領域は，意志の無制約的展開を可能にするばかりでなく，その展開そのものが「意志」の本質によって導出されている，という視圏に立つのである。ここにおいて，科学・技術は再び芸術に融合する，一つの可能性が開かれる。

Ⅷ

「芸術の視点に立つこと」，この近代技術の「極限」において「思考すべきこと（das Zudenkende）」が完全に顕になる。思考は，計算的思考から，自らの本質的由来へと退き，その運命を迎える思考へと「転回」する。「極限」からその「根源」へと帰りゆく思考の，丁度頂点において，ハイデガーは，近代技術の領域における「巨大なもの（das Riesenhafte）の出現」[28] という現象を取り上げている。これは上述の，意志の「高揚」としての芸術に帰属する現象である。そこでハイデガーが例として挙げているのは，「遠距離」，「大量性」といった単なる巨大化の方向だけでなく，「原子物理学の数」といった「極微の方向」にも広がる現象である。他にも論理や統制原理の精密化，厳密化，といった現象も含まれよう。この巨大化現象が「芸術」の視点においてのみ明らかになるのは，この現象に独特の変化が内包されているからである。

「計画，計算，設備，確保の巨大なものが，量から独自の質に飛躍するや，この巨大なもの常に普く計算が可能であるところのものが，遂に計算不可能なものに転化する。人間が基体になり，世界が像へと変化するや，計算不可能なものが見えない影となって，地上の一切の事物を蔽っている。

この影を通じて近代の世界は，表象から脱き去られた（entzogen）空間へと差し出され，かくして計算不可能なものに対してそれ独自の規定性と，歴史的な唯一性を付与するのである。しかし，この影は人間に或る別なものを示しており，これを知ることは我々現代人には拒まれている」。

「人間はこの計算不可能なものを，ただ真の省察（Bsinnung）の力による創造的な問いと形成においてにみ，知ることになろう，即ちその真理を守護することになろう」。[29]

「省察的思考」によって知られるものは，近代技術の行方ではなく，その運命的な由来にすぎない。その一端をハイデガーは『芸術作品の根源』において示唆している。そこで，西洋の技術領域の始原において重要な役割を果たした「道具」について，いわゆる「機具的」観念とは違った存在性を，明らかにしている。

「道具」の存在の本質は，「役立つ」という点にのみあるのではない。道具が本来の在り方を満たしているときには，決して「手段―目的」（原因性）という明るみには上がってはこない部分をもっている。「役立つということは，道具の本質的な存在の充実の中に根を張っている。それは信頼性（Verläßlichkeit）と呼ばれる」。この信頼性のお陰で，人間は「道具を通して，大地の沈黙せる呼び掛けの中へ放ち入れられる」。また道具の信頼性のお陰で，人間は「自分の世界に自信をもつ」。「大地」と「世界」は，そこに生活している人々にとって，「ただそこに，即ちその道具の中に存在する」。この信頼性ということがはじめて，「単純な世界にその保障（Geborgenheit）を与え，大地に対して，その絶えざる衝迫（Andrang）の自由を確保する」。[30]

かかる大地と世界の相互関係を内包する道具の「存在の充実」は，役立つもの（用象）の中には決して現われない。役立つものは，それが信頼性を失うならば，単なる使用や利用，製作の場で，精々手慣れた，或いは使い慣れたそれぞれの機具へと分散してしまうだけである。そしてこの分散を統一するものは，やはり大地を離脱し，世界が拒まれた主体（主観：基体）としての人間の自我意識でしかなくなる。この自我意識は，道具の存在をその「作用」から表象し，因果関係のなかに位置付けることしかできない。本来人間は，道具の中に現成する「世界と大地」の関係の中に住まっていた。即ちそこを故郷としていた。道具が「手段―目的」関係の明るみに晒しだされた時，人間は故郷を失ったのである。故郷喪失が，西洋の運命となったとき，帰郷の道の探求もまた運命となっている。その道にふさわしい問いは，もはや「何故（Warum）」ではなく，「何処から（Woher）」であろう。「何処から」と人間が問うとき，人間は必然的に「或る別なもの」の存在に直面する。その「別なもの」とは，我々が親しんできた「存在事物」には無縁なもの（das Fremde）＝存在である。その存在に出会って，人間は初めて本来の「羞恥」へと気分づけられるであろう。（五）完

註

1）『岡山理科大学紀要 B』，「科学と詩作」（一～四）第23～26号参照

2）以下節末までの文章は，拙著「数学的思考―苦痛の前奏」（『哲学と宗教』溪水社所収』114～115頁からの引用。

3）M. Heidegger ; Die Technik und die Kehre, Neske, 2 Aufl. 1962. s. 6

4）ibid. s. 7

5) ibid. s. 7
6) ibid. s. 7
7) ibid. s. 8
8) ibid. s. 9
9) ibid. s. 10
10) ibid. s. 11
11) ibid. s. 11
12) ibid. s. 12
13) ibid. s. 12
M. Heidegger ; Einführung in die Metaphysik, Tübingen, 1953, s. 122
14) Die Technik und die Kehre, s. 13
15) M. Heidegger ; Die Frage nach dem Ding, Tübingen, 1962, s. 34
16) ibid. s. 28
17) ibid. s. 26
18) ibid. s. 18
19) ibid. s. 48
20) M. Heidegger ; Holzwege, Frankfurt, 2 Aufl. 1950, s. 84
21) Die Technik und die Kehre, s. 16
22) ibid. s. 18
23) M. Heidegger ; Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit, Tübingen, 1971, s. 34
24) ibid. s. 39
25) Holzwege, s. 216
26) ibid. s. 221
27) ibid. s. 222
28) ibid. s. 87
29) ibid. s. 88
30) ibid. s. 23/4

Wissenschaft und Dichtung (Nr. V)

—— Zur Quelle des Urteils ——

Satosi NAKASIMA* und Teruo KURISU**
*Abteilung der Allgemeinen Bildung von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama
1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan
**Aushilfsdozent von der Naturwissenschaftlichen Universität Okayama
(Am 30. September 1991 empfangen)

Haidegger sucht die abendländische Metaphysik im Ganzen als eine Epoche vom Gescick des Seins zu erfassen und als die Seinsgechichte, die dem Platon entstammt und im Nietzsche sich vollendet, zu erschließen. Die Seinsgeschichte hat den einzigartigen Wege eingeschlagen, d. h. die Entstehung der Vorstellung vom Ding überhaupt, die Erforschung der inneren Struktur vom Satz und die Ausdehnung der modernen Technik. Sich haltend auf den Wege, versuchen wir das wesentlichen Bedeutung von der Technik und der Kunst zu erläutern.